

地域への問題意識と学びの意欲をレポート・論文で測り、センター試験で基礎学力も重視する

地方の優秀な生徒を早稲田で育成し地域に還元

早稲田大学は来年度の入学者から導入する新入試制度「新思考入試（地域連携型）」をこの4月に発表した。地域課題に対する活動内容をまとめたレポートと、総合試験、センター試験の3段階による試験で、文化構想学部、文学部、商学部、人間科学部、スポーツ科学部の5つの学部の志願者を対象としている。

大学の規模が大きく、学部自治が強い同学では、今までの入試は一般、推薦、AOとも、13の学部で個々に設計されてきた。学部横断で行う入試は異例の取り組みだ。

「学外から見た『早稲田』とは大学全体を指すものであり、大学全体で早稲田としての価値を裏付けていくために必要な取り組みだと考えました」（沖清豪教授）

早稲田は2032年に迎える創立150周年に向け、「WASEDA Vision 150」という大学改革を推進中だ。「新思考入試（地域連携型）」は

入試改革の第一弾と位置づけられている。入試改革の口切りに、「地域連携」を掲げた背景について伺った。

「建学以来の本学は、全国から学生が集まり切磋琢磨する場でした。それが、現在では7割が首都圏出身の学生で、地方出身者比率が落ち込んでいます。学生の多様性が欠如することは、大学のアイデンティティにも関わります。裏を返せば、地域の国公立大学に進学する学生が増えていると考えられます。将来、地域に貢献するために地元に残って学びたい生徒たちです。ただ、地域貢献はその地域にいなければ学べないのではなく、一度外から地元を見たり、他の地域との比較など広い視点から学ぶことも必要です。こうした地域貢献への意欲が高い生徒たちを早稲田に呼び込み、その力をさらに伸ばして地域に還元したいと考えたのです（図2）」（沖教授）

もうひとつ、同学が抱えていた課題が、有数の難関校であるがゆえに、一般入試生の中で入学後に燃え尽きてしまう層の存在だ。彼らの目標は「入学後に何を学びたいか」ではなく、早稲田

に入学すること自体になってしまっているのだ。

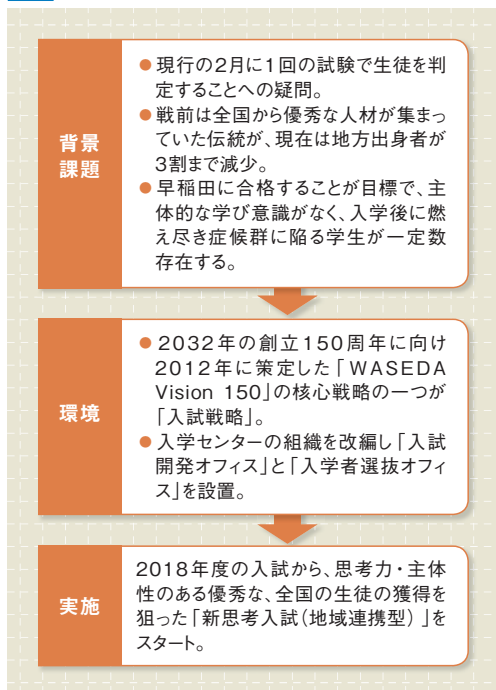
この2つの課題を入試で解決するために、大学で学びたいことを明確にもち、国公立大学を目指している地方の学生を取り込む入試について検討した。早稲田の一般入試は基本3教科で、いずれも難易度はかなり高い。センター試験のために幅広い教科で入試対策をしている生徒に早稲田に目を向けさせるために、学力+αの正課外活動も評価する入試方法として開発されたの

が「新思考入試（地域連携型）」なのだ。

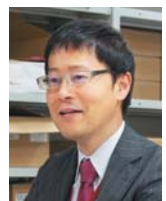
学びの目的意識と大学での学びが接続できているか

「新思考入試（地域連携型）」の流れは図3の通りだ。特徴は、1次と2次で志望する学部で地域課題に対して何を学びたいか、そのために高校まで徹底的に問うことと、3次のセンター試験で学力も担保することだ。いわば「学力型のAO」だ。

図1 早稲田大学の入学者選抜改革のステップ



入学センター入試開発オフィス長 沖 清豪教授



教務部入学センター課長 渡邊慎一郎氏

取材・文／長島佳子



図3 「新思考入試(地域連携型)」の概要

- 対象学部／
文化構想学部、文学部、商学部、人間科学部、スポーツ科学部
- 求める人材：
これまでの学習や当該地域での経験を踏まえて十分に培われた「地域へ貢献」する意識をもつ人材(センター試験80%以上の学力を有し、学部で学びたいことが明確な人材)
- 入試の流れ

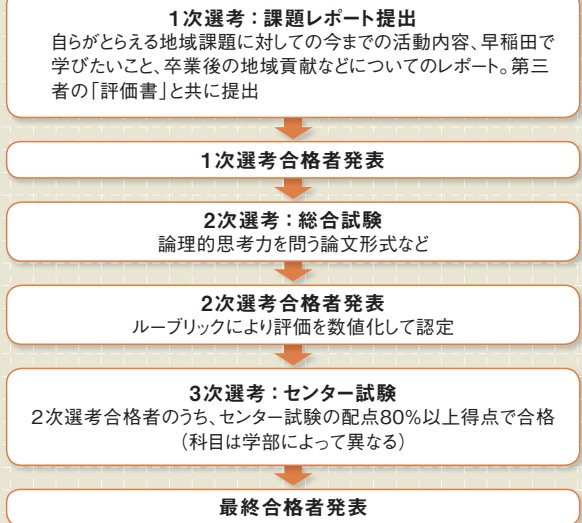
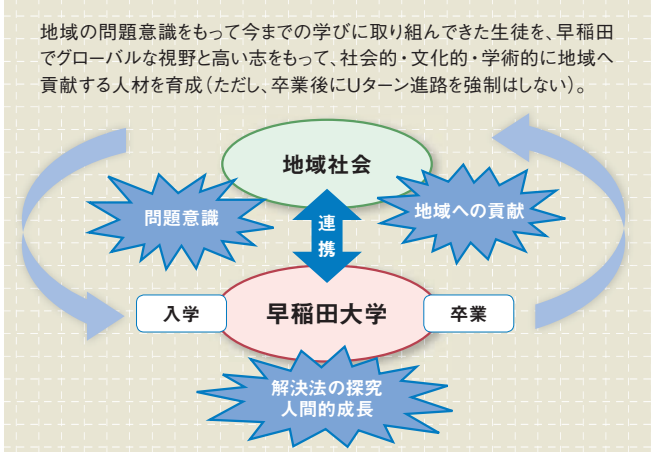


図2 「新思考入試(地域連携型)」の目的



「学びの目的意識が明確で、正課外活動などをがんばってきた潜在的な優秀層を発掘し、彼らに基礎学力もがんばってもらおうという狙いもあります。想定した層がどのくらい存在するか測るためでもあります。また本学の入試改革は高校現場への影響が少なくないため、一般入試の改革は慎重に検討しています(沖教授)

初年度実施の今年は、定員を決めずに若干名募集からスタートする。1次選考の課題レポートは、地域についてどんな課題を設定し、どんなことをしてきたかの活動報告書だ。活動内容は学校での探究的な学びの経験でも、学外でのボランティア活動などでも構わな

「新思考入試(地域連携型)」で入学する学生には、学部を越えたさまざまな活動で活躍することを期待している。例えば、早稲田には全学共通の「グローバルエデュケーションセンター(GEC)」や「平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)」などでの科目や活動がある。GECには新しいリーダーシップ養成や地域連携のプログラムが用意されている。これらの履修を義務ではなく、自然に目が向き能動的に選んでい

早稲田の変化が高校に良い影響となることを期待

2次選考は広い視野でものこを捉えられるかを判断する試験。今年は論文形式を予定しており、サンプル問題はすでに公開されているが、来年の試験以降は口述試験なども検討している。

ただし、レポートの内容を証明する第三者の「評価書」の提出も求めている。これは、推薦入試の際に担任の先生が添える推薦状のようなものだが、学外活動も認めているため、ボランティアの代表など、身内でなければ教員以外の評価書でも可としている。ここでの評価基準は、課題設定能力や課題の解決能力と、地域との結びつきだ。さらに、解決しようとしていることが、志望する学部で学ぶ内容とどう接続して、それを通じて将来どのような生きていきたいかが言語化されているかどうかだ。

「新思考入試」を今後全学部にも広げていくという早稲田の改革に今後注目したい。

郎氏)

「高校の現場同様、社会の変化に合わせて本学も変わろうとしています。我々の取り組みが高校の教育を変えていく手助けにもなることも期待しています(沖教授)

このように、アドバイザー教員を付けてフォローしていく予定だ。

このような共通センターのプログラムは、社会の変化や高大接続を意識した早稲田の変化でもあるが、既存の授業も大きく変わってきている。例えば、現在は50人以下の授業が全体の80%を超えており、アクティブラーニング型授業も増えている。学生の主体的なグループ学習を推進するために、オープンスペースを増設し、授業外学習がしやすい環境づくりも広がっている。

「授業が変わるといことは、教え方も変わらなければならないということ。そのため、海外の協定大学のFD(ファカルティ・ディベロップメント)・教員な取り組み」プログラムへの参加や、ティーチャングアシスタントの育成などにも力を入れていきます(渡邊慎一

図4 「新思考入試(地域連携型)」の評価基準

- 1次・2次選考で評価するポイント** ※詳細は非公開
- 高校水準としての、課題設定能力、課題解決能力
 - 課題と地域との結びつき
 - 解決しようとしていることと、志望する学部の学びとの結びつき